

大学生における幼少期に受けた俗信的しつけの経験と

現在の道徳的判断タイプとの関連

首藤 敏元	埼玉大学教育学部乳幼児教育講座
利根川 智子	東北福祉大学教育学部教育学科
上岡 紀美	仙台白百合女子大学人間学部人間発達学科
樟本 千里	岡山県立大学保健福祉学部保健福祉学科

キーワード: 俗信的しつけ言葉、道徳的判断、過剰抑制型、道徳的自律

問題と目的

子どもが社会的規範を守り、正しく生きてほしいと思う親の願いは今も昔も変わらない。しかし、現実的には、親は子どもの逸脱行為に戸惑い、対応に苦慮することが多い。日本社会には、民俗行事としての「なまはげ」（秋田県男鹿地方の来訪神のひとつ、2018年無形文化遺産に記載）をはじめ、昔話や絵本の中で人を戒めたり、悪事に罰を与えたりする役として、鬼の登場するものが数多くある。最近では、子どもをしつけるために、鬼が登場するスマートフォン・アプリケーションも登場した。養育場面で、親が「よい子にしないと鬼が来るよ」などと子どもの不安感をあおるしつけ方は、子どもの社会的規範意識を高めるのだろうか。

社会的規範意識は社会的認知の一部であり、規範意識は道徳(moral)、慣習(convention)、個人(personal)といった複数の領域(domain)の認知から成る(Turiel, 1983, 1998, 2006, 2008)。対人葛藤や複雑な社会的事態に対して、これらの認知を適切に調整させて、ひとつの判断と行動を生み出すことを道徳的自律という(首藤・二宮, 2003; 首藤・利根川・樟本・上岡, 2019)。3種類の質の異なる領域の認知は幼児期からの質の異なる社会的相互作用から発達する(Nucci & Nucci, 1982; 首藤・二宮, 2003, 2014; Turiel, 1983, 2006)。親の養育行動は子どもの社会的認知の発達にとって社会的相互作用の文脈として機能する。つまり、子どもの領域認知の発達にとって、親の養育行動、特にしつけ場面での言葉かけや行動の意味づけなどのかかわり方は、子どもの領域認知、さらには道徳的自律にとって重要な環境要因のひとつになる。「なまはげ」や「鬼」の登場するアプリケーションなどを用いて子どもに恐怖心を引き起こす親のしつけ方は、子どもの道徳的自律にどのような影響を与えているのだろうか。

Turiel(1983)は「ご挨拶をしないとお母さん悲しい」のように慣習的な行為に道徳的な要素を付随させるしつけは領域調整を歪める経験になると指摘する。これに類似するものとして、日本社会には、伝統的に、子どもに恐怖心をもたせることで大人の期待や社会的規則に追従させようとする「俗信的しつけ言葉」が多数存在する。たとえば、「嘘をつくと、舌が伸びる」などである。この種の「脅しのしつけ」(小川・鎌田, 2001; 村石・安見・関口, 1996)は、「なまはげ」や「鬼」アプリケーションと同様に、子どもの不安やおその感情を引き起こし、それをしつけに利用する

という点で共通している。「脅しのしつけ」を幼少期に受けた若者はどのような道德観を発達させているのだろうか。本研究は、大学生を対象にして、幼少期に受けた俗信的しつけ言葉の経験と現在の道德的判断タイプとの関連を分析することを目的とする。

俗信的しつけ言葉は「脅しの言葉」とも言われており、現在の日本社会に 100 を超えるものが存在している(村石・安見・関口, 1996)。説得の効果に関する心理学研究(Grusec & Goodnow, 1994)によると、子どもに恐怖心を与える説得の仕方は、子どもを従順にさせる即時的な効果はもつものの、子どもの行動制御の発達と価値の内在化には効果をもたない。また、「ご飯を一粒でも残すと、目が見えなくなる」や「食卓に足を乗せると足が曲がる」のようなしつけ言葉は、子どもの障害者理解を歪める恐れのあることを指摘する研究(徳田, 2000)もある。したがって、俗信的しつけ言葉も短期的な効果しか持ち得ず、本来親の期待する長期的で人格発達上の効果はないことが予想できる。Kusumoto, Ueoka, Tonegawa, & Shuto(2019)は道德的判断に個人差があり、場面の特徴に応じて道德的領域の認知と慣習、及び個人の領域認知を適切に調整できるタイプの他に、場面の違いを超えて過剰に抑制的な判断をするタイプ(過剰抑制型)と、逆に個人の自由を拡張させて判断するタイプ(自由感肥大型)の存在を示し、これらのタイプが思春期から成人期前期(小学生、中学生、高校生、及び大学生)において一貫して認められることを見出した。本研究において、幼少期に俗信的しつけ言葉を多く経験することは道德的判断に偏りを生じさせることになるだろうと仮定した。

方 法

1. 研究参加者

首都圏の 3 つの大学に通う大学生 380 名(男女同数, 平均年齢 19.6 歳)が調査に協力した。

2. 質問項目

(1) 俗信的しつけ言葉

本研究では俗信的しつけ言葉を「『ご飯を残すと目がつぶれる』など、しつけ場面で使われる戒めの言葉」と定義し、村石・安見・関口(1996)の研究を参考にして 13 種類(例、「嘘をつく舌を抜かれる」、「夜に爪を切ると親の死に目にあえない」等)を設定した(Table 1)。参加者はそれぞれについて「幼少時代(幼児期から児童期)に周囲の大人から言われた程度」を 4 段階(1.全く記憶にない、2.言われた覚えはある、3.時々言われた、4.よく言われた)で回答した。また、「今の生活に影響している程度」について 5 段階(0.全く記憶にない、1.ほとんど残っていない、2.今でもたまに意識する、3.今でも時々意識することがある、4.現在の生活に定着している)で回答した。

(2) 道德的判断

首藤・二宮(2003)の大学生対象の調査で使用された社会道德的逸脱行為に関する 25 項目が用いられた。25 項目は、他者や集団に危害を与える(反社会的)行為、不親切な行為、因習(規則)違反行為、公衆道德違反、自己の心身を害する(自愛のなさ)行為の 5 つのカテゴリーから 5 項目ずつ構成されていた。具体的に、「親の財布から黙ってお金を取る」、「目上の人に若者言葉で話す」、「家の敷居を踏んで歩く」などであり、参加者はそれぞれの行為の善悪について「1.自分の好きなようにしてもよい」から「4.絶対にしてはならない」までの 4 件法で回答した(Table 2)。

3. 手続き・倫理的配慮

質問票は無記名であり、授業の中で配布され、実施後、回収された。回答時間は約 10 分であった。参加者には教示文の中で、回答は任意であり回答途中でも中止できること、回答内容は研究にのみ使用すること、個々の回答が外部に漏れる恐れはないこと、授業の成績・出席とは関係しないことが強調されていた。回答用紙の提出をもって調査に同意したとみなした。回収率は 82.5 %であった。

結 果

1. 俗信的しつけ言葉の経験

項目ごとに「言われた程度」の回答(1～4 点)に「生活に影響している程度」の回答(0～4 点)を乗じた得点(0～16 点)を算出した。まったく言われた記憶がない場合は 0 点となる。この得点は俗信的しつけ言葉を受けた経験だけでなく、しつけ言葉が現在の生活行動への統制力をもつ程度も表している。内在化度の上位 3 項目は、「ご飯を食べてすぐ寝ると牛になる」($M=6.55, SD=5.44$)、「一円を笑う者は一円に泣く」($M=5.25, SD=4.83$)、「夜口笛を吹くとへビが出る」($M=4.84, SD=5.46$)であった。俗信的しつけ言葉の内在化得点は一因子構造であった(α 係数 .87)ため、13 項目の合計得点を俗信的しつけ言葉経験得点(0～208 点)とした。性差は有意ではなかった(男性 $M=38.94, SD=33.55$; 女性 $M=45.14, SD=37.84$)。

Table 1 俗信的しつけ言葉の経験		n=380	
俗信的しつけ言葉 ^{a)}		平均値	SD
4.ごはんを食べてすぐに寝ると、牛になる		6.55	(5.44)
1.一円を笑う者は、一円に泣く		5.25	(4.83)
11.夜口笛を吹くと、へビが出る		4.84	(5.49)
12.夜爪を切ると、親の死に目に会えない		4.54	(5.23)
13.霊柩車を見たら親指を隠さないと、親の死に目に会えない		4.16	(5.55)
2.嘘をつく、舌を抜かれる		3.46	(4.42)
10.へそを出していると、へそを取られる		3.35	(4.09)
6.食べ物を粗末にすると、目がつぶれる		2.12	(4.32)
3.ごはんをこぼす・残すと、目がつぶれる		2.11	(4.29)
5.敷居を踏むと、お父さんの頭を踏んだことになる		1.78	(3.93)
9.火遊びをすると、おねしょをする		1.75	(3.53)
8.泣くと、おばけが呼びに来る		1.13	(2.81)
7.テーブルの上にあがると、足が曲がる		1.00	(2.89)
俗信的しつけ言葉経験得点(合計点)		42.04	(35.70)

^{a)} 数字は質問紙での項目番号。上から得点順に並べられている。

2. 道徳的判断タイプ

25 項目の判断得点(1～4 点)を因子分析(主因子法、斜交回転)した結果、2 因子が抽出された(Table 2)。因子 1 には規則違反と自愛のなさに関連した項目の負荷量が高く、因子 2 には反社会的項目

の負荷量が高かった。因子1は状況に応じて判断の変わりうる慣習／自己管理領域、因子2は直接的に他者へ悪影響をもたらす道德領域の認知を反映していると解釈される。

2つの因子得点をK-Means法によるクラスター分析にかけたところ、3つのクラスターが見出された(Figure 1)。クラスター1(N=180)は両因子の得点が高く、過剰抑制を示す型、クラスター2(N=98)は両因子の得点が高い統制不全(自由肥大)型、クラスター3(N=102)は慣習／自己管理領域では自由感が強く、道德領域では抑制的になるといった領域対応型であると定義された。性差をみたところ、男性には統制不全型が多く、女性には過剰抑制型と領域対応型が多かった($\chi^2(2, N=380) = 29.12, p < .001$)。

Table 2 道德的判断の因子分析結果

項目 ^{a)}	因子1 慣習／自己 管理の領域	因子2 道德領域	共通性
10.お金を大切にしない。	.696	-.130	.320
9.喫煙する。	.600	-.125	.319
17.母の日や父の日等の記念日に、プレゼントを贈ったり連絡をしたりしない。	.529	-.029	.213
5.自分の部屋を掃除しない。	.492	.013	.335
13.昔からの慣習を無視する。(敷居を踏んで歩く等)	.488	.093	.352
16.知らない番号からの電話に出る。	.447	-.066	.415
7.痩せようと思い、一日一回しか食事をとらない。	.429	.000	.337
19.お年寄りや子ども連れがいても席を譲らない。	.415	.098	.327
25.ものを食べながら歩く。	.413	.202	.378
12.ご飯を残す。	.394	.068	.471
8.テストの直前にしか勉強しない。	.393	.001	.275
6.近所の目上の人に“若者言葉”で話をする。	.380	.237	.307
20.電車やバスの中で足を組んで座る。	.346	.089	.424
15.深夜に一人で歩いて帰る等、防犯意識を持たない。	.323	.188	.326
23.路上にごみをポイ捨てる。	-.170	.824	.242
22.路上にガムやつばを吐く。	-.123	.754	.315
18.並んでいる列を無視して入り込む。	-.085	.620	.360
1.親の財布から、黙ってお金を取る。	.053	.451	.366
2.学費(授業料)を遊び目的で使いこむ。	.071	.450	.227
21.電車やバスの中で携帯電話で話をする。	.134	.439	.355
11.人を陥れるような嘘をつく。	.182	.363	.519
24.仲間と道幅いっぱいに広がって歩く。	.167	.343	.560
3.ネット上での情報を自分のものとして引用する。	.009	.342	.340
因子間相関		.510	

^{a)}数字は質問紙での項目番号。

3. 道德的判断タイプと俗信的しつけ経験との関連

俗信的しつけ経験得点について、2(性)×3(道德的判断タイプ)の分散分析を行った結果、道德的判断タイプの主効果のみ有意となった($F(2, 374) = 3.78, p < .05, \eta^2 = .02$)。俗信的しつけ経験得点は抑制過剰型($M = 47.86$)が最も高く、次に領域対応型($M = 39.37$)、そして統制不全型($M = 34.12$)であった。

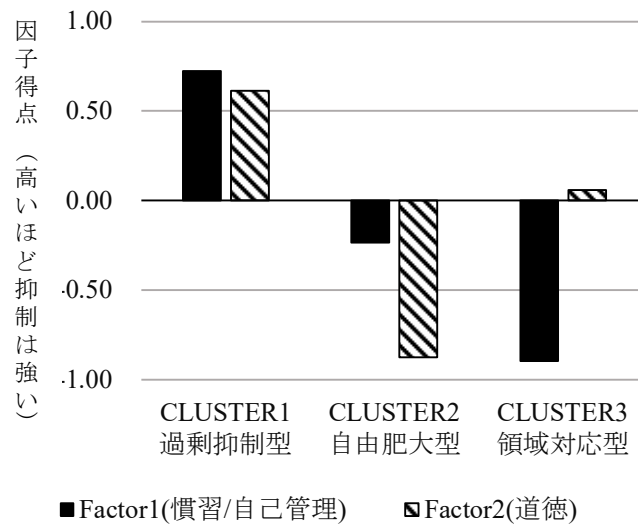


Figure 1 クラスタ分析の結果

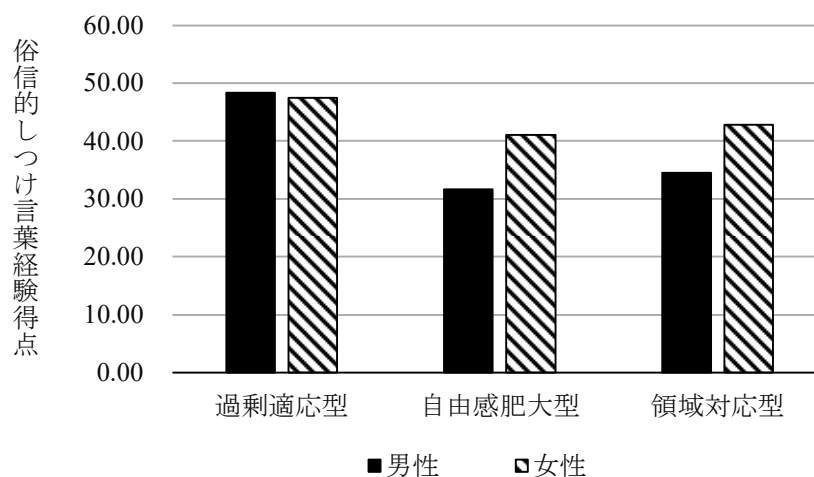


Figure 2 道徳的判断タイプと性別にみた俗信的しつけ言葉経験

考 察

本研究に参加した大学生が幼少期に受けた俗信的しつけ言葉経験の合計得点は、平均して 42.04 点(満点は 208 点)であり、さほど大きくはなかった。しかしながら俗信的しつけ言葉は、子どもに恐怖心を与える内容のものが多いため、たとえ経験度は少なくても、また内在化度が低くても、その言葉を受けた時には多少の恐怖感や不安感を経験したと思われる。実際に俗信的しつけ言葉を多く受けた大学生の道徳的判断には歪みが認められた。つまり、道徳的な逸脱場面だけでなく、慣習的および自己管理上の違反に対しても自己抑制的になる大学生は、俗信的しつけ言葉経験を

強くもっていた。挨拶や言葉づかいといった慣習行為は、通常は守らなければならないものであるものの、状況によっては他者との同意に基づき、あるいは自己の意思で変容可能な行為でもある。ダイエットや嗜好と関係する自己管理の行為は、基本的に他者に悪影響が及ぶものではなく、個人の裁量の範囲内で自己決定できるものである。このような慣習と自己管理の行為場面であっても、俗信的しつけ言葉経験を多く持っている大学生は従順で抑制的になることが示唆された。この結果は、幼少期のしつけであっても、規則や大人の期待に一樣に従わせようとするしつけ言葉の影響が長期間続く可能性を示唆している。この過剰抑制の背景には、大人から言われたことに違反する行為や社会的規範に背く行為に対する不安や恐怖が隠れていることも考えられる。

Kusumoto ら(2019)は、思春期から成人期前期までの参加者に、道徳、慣習、個人領域の要素が含まれる様々な場면을提示し、その場面での自由裁量判断を求めた。参加者の年齢は異なっていたものの、共通して、領域の特徴に合致する判断をした「領域対応型」だけでなく、慣習と自己管理場面にも「個人の自由」が及ぶと判断する「自由感肥大型」、及び私的な場面でも「個人の自由」を抑制する「過剰抑制型」の参加者がいることが示された。そして、「自由感肥大型」の参加者は相対的に学校適応が悪く、親への信頼感も低く、道徳的無力感が強く、心理的適応が悪いことが示された。Kusumoto ら(2019)の見出した「自由感肥大」と本研究での「過剰抑制型」は、道徳的自律の観点からは真逆のタイプである。道徳性に関する社会的領域理論(首藤・二宮, 2003; Turiel, 2006, 2008)では、行為者の意図や動機、他者との関係、状況の特徴などを考慮した上で、ひとつの場面に対して複数の領域認知を働かせて(領域調整)、自分にも他者にも公正な解決をしようとするのが道徳的自律である。換言すれば、道徳的自律には領域調整が求められる。「過剰抑制」も「自由感肥大」も多面的な領域調整ではなく、一樣な指向性を示していることから、本研究の結果は、俗信的しつけ言葉が子どもの道徳的自律に歪みをもたらすことを示唆している。

Tonegawa, Ueoka, Kusumoto, & Shuto(2019)は、幼児期の子どもを育てている親の俗信的しつけ言葉経験を調査し、俗信的しつけ言葉の内在化の程度が高い親ほど、子どもを親の意思でコントロールしようとする傾向が強くなることを見出した。また、場面別養育態度との関連をみると、行為の理由に関係なく悪いと判断されうる道徳的逸脱と子どもの意思に委ねてもよいと判断できる個人領域の行為場面では、俗信的しつけ言葉経験との有意な関連性を認められないものの、状況によって善悪の判断が異なってくる社会的慣習違反への厳しいかわり方と有意な関連が認められた。彼らの研究結果は、幼少期に受けた俗信的しつけ言葉が、親になってからの子育ての仕方を統制的な性質にすることを示唆している。俗信的しつけ言葉は、子どもを従順にするための文化的な知恵として何十年、何百年もの間、日本社会で受け継がれてきた。しかし、そのしつけを受けた時の恐怖心は、若者になってからの道徳的自律に歪みをもたらし、親になってからの統制的な子育てを強め、そして自分の子どもに恐怖心を植え付けることになる可能性を示唆しているのかもしれない。

Bandura(2016)は、反社会的な行為にも道徳的不活性化(moral disengagement)という社会的認知のプロセスが存在することを理論化し、実証研究を続けている。道徳的不活性化は認知の歪みから生じる。俗信的しつけ言葉には、「ご飯を残したら、目がつぶれる」のように、行為と結果との間に理性的で合理的な因果関係はない。俗信的しつけ言葉の経験と道徳的自律の歪みとの有意な関係は、俗信的しつけ言葉が道徳的判断を不活性化させる文化的な要因であることを示唆しているのかもしれない。これは今後の研究で吟味されなければならないだろう。

文 献

- Bandura, A. (2016). *Moral disengagement: How people do harm and live themselves*. New York, NY: Worth publishers.
- Grusec, J. E., & Goodnow, J. J. (1994). Impact of Parental Discipline Methods on the Child's Internalization of Values: A Reconceptualization of Current Points of View. *Developmental Psychology*, 30, 4-19.
- Kusumoto, C., Ueoka, K., Tonegawa, T., & Shuto, T. (2019). Characteristics and psychological consequences of Japanese adolescents' personal autonomy. *Bulletin of Faculty of Health and welfare Science, Okayama Prefectural University*, 25, 49-64.
- 村石昭三・安見克夫・関口準(1996). 幼児に対する「しつけ言葉」の研究 東京家政大学紀要, 36(1), 121-130.
- 小川圭子・鎌田陽世(2001). 幼稚園と保育所における保育者のしつけ言葉に関する一考察:「おどしのしつけ言葉」を中心に 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 265.
- 首藤敏元・二宮克美.(2003). 子どもの道徳的自律の発達 風間書房
- 首藤敏元・二宮克美.(2014). 子どもの道徳的発達の文脈としての母親の「個人の自律性」概念 発達心理学研究, 25, 356-366.
- 首藤敏元・利根川智子・樟本千里・上岡紀美.(2019). 小学生における対人的攻撃行動場面での社会道徳的領域調整の発達 埼玉大学紀要教育学部, 68(2), 21-31.
- 徳田克己(2000). おどしのしつけ言葉の障害理解に与える影響 (7 しつけ言葉:俗信としての機能・年代差と地域差・おどし効果の副作用) 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, S45.
- Tonegawa, T., Ueoka, K., Kusumoto, C., & Shuto, T. (2019). Effects of child Experiences of discipline using superstitious sayings on current parenting attitudes in parents of young children. *Paper presented at the 20th PECERA International Conference (Taipei), Poster session 3, Room 204, 503-504.*
- Turiel, E. (1983). *The development of social knowledge: Morality and convention*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Turiel, E. (1998). The development of morality. In W. Damon (Ed.), *Handbook of child psychology, 5th ed., Vol.3: N. Eisenberg (Ed.), Social, emotional, and personality development.* (pp.863-932). New York, NY.: Wiley.
- Turiel, E. (2006). The development of morality. In W. Damon, Lerner, R. M., N. Eisenberg (Eds.), *Handbook of Child Psychology, Volume 3, Social, Emotional, and Personality Development, 6th Edition* (pp.789-857), New York, NY: Wiley.
- Turiel, E. (2008). Thought about actions in social domains: Morality, social conventions, and social interactions. *Cognitive Development*, 23, 136-154.

付 記

本研究の一部は JSPS 科研費 JP17H02629 の助成を受けた。本研究の実施にあたり、ご協力いただいた大学生の皆様へ深く感謝申し上げる次第である。

(2020年3月31日提出)
(2020年4月10日受理)

Effect of Childhood Experience with Superstitious Sayings as Pedagogical Discipline upon Current Moral Judgment Type in Japanese University Students

SHUTO, Toshimoto

Saitama University, Faculty of Education

TONEGAWA, Tomoko

Tohoku Fukushi University, Faculty of Education

UEOKA, Kimi

Sendai Shirayuri Women's College, Faculty of Human Sciences

KUSUMOTO, Chisato

Okayama Prefectural University, Faculty of Health and Welfare Science

Abstract

Superstitious sayings, e.g., “If you don’t finish your rice (even one grain of rice left), you will go blind”, are kinds of the disciplinary phrases of admonishment used in child-rearing situations. The purpose of this study was to examine the relationship between the experience of discipline using superstitious sayings received in childhood and the current characteristics of moral judgments among 380 Japanese university students. Participants were presented with 13 kinds of superstitious sayings traditionally transmitted to Japanese society, and for each of the 13 items, they rated the degree to which they experienced in childhood and the experiences affected their current life. In addition, the participants were shown 25 items about socio-moral issues, and rated each of them the degree of personal freedom. Factor analysis was carried out on judgment scores of the personal freedom, and two factors (moral domain, conventional / personal domain) were extracted. The participants were classified to three types of moral judgments, i.e., domain-consistent type, excessive feelings of freedom type, and morally over-controlled type, as a result of the cluster analysis on two factor scores. Results of ANOVA showed that the morally over-controlled type students had significantly higher levels of experience and influence of the superstitious sayings than other types. This result was considered that the style of the discipline which brings a child fear and anxiety may distort a child's moral judgments, and will prevent moral autonomy in the future.

Key Words: superstitious sayings, moral judgments, morally over-controlled, moral autonomy